

二つの語彙的緊密性

－韓国語（と日本語）の複合動詞－

和田 学

1. はじめに

語彙部門で形成された語の一部が移動などの統語規則の適用対象にはならないことは語彙的緊密性 (Lexical Integrity) と呼ばれ、広く受け入れられている。語彙的緊密性にはいくつかの定義があるが、ここでは Lapointe (1985, 8) の定義を挙げておく。¹

(1) Generalized Lexical Hypothesis

No syntactic rule can refer to elements of morphological structure.

影山 (1993; 10) では日本語を例に、語彙的緊密性の具体的な現れとして、次の様な下位分類を挙げている。第一に、形態的な不可分性として語が統語的に分断することができないことを挙げている。日本語の語彙的複合動詞は形態的な不可分性を見せることから、一つの語であることは明白である。

- (2) a. 子供の希望を無残に踏みにじった。
b. *こどもの希望を踏み無残ににじった。

第二に、複合語の一部を代用表現に置き換えることはできない (語彙照応の制約)。

- (3) a. 遊び暮らす → *そうし暮らす (影山 (1993, 80))
b. 押し開ける → *そうし開ける

第三に、格や時制などの統語的要素が語の内部に現れることは許されない (統語的要素の排除)。日本語の複合動詞は、次の例に見るように、その内部にとりたて詞を含むことができない。

- (4) *飛びも上がる、*泣きも叫ぶ (影山 (1993, 76))

以上に挙げた語彙的緊密性の全ての下位分類に関して、日本語の語彙的複合動詞はそれが一語であることを示す振る舞いを示すことから、これらの下位分類が全て一つの自然類 (語彙的緊密性) を成していることを支持する様に見える。

これに対し、一部の韓国語の複合動詞を詳細に検討してみると、これらの語彙的緊密性の全てのテストに関して、予測通りの緊密性を示すものと、テストの内の一部に対して緊密性を示さないものがあることが分かる。具体的には、韓国語の複合動詞の内、ある類は、統語的な不可分性や、代用表現への置き換えに関しては、一語として振る舞うのに対し、統語的要素の排除に関しては、予測に反して、複合動詞内部に統

¹ 語彙的緊密性については Selkirk (1982, 70)、di Sciullo and Williams (1987, 49)、Spencer (1991, 42) も参照。

語的要素の介在を許す。この事実は語彙的緊密性テストの下位分類が、二つの類に分けられることを示している。

これまでの研究では、語彙部門で形成される語は形態的にも統語的にも完全な一語となり、統語部門では内部構造が見えない単位であると仮定されることが多い。多くの複合語において、この仮定は妥当であるが、これに加えて本稿では、ある条件下では、語彙部門で形成された複合語が、意味や項構造に関しては一語であるが、その構成要素が統語部門においてそれぞれ独立した語である場合があると主張する。

本稿の構成は、次の通りである。2節では、韓国語の動詞複合表現を概観した上で、語彙部門で形成されることが明らかな意味的に不透明な複合動詞の振る舞いを見る。3節では、日本語の様々な複合動詞を検討し、日本語にも限られた数ではあるが、部分的に語彙的緊密性テストに従わない複合動詞が存在することを示す。4節では、全ての語彙的緊密性テストに従う複合動詞と一部のテストにしか従わない複合動詞について論じる。6節はまとめである。

2. 韓国語の複合動詞

2. 1. 韓国語の動詞複合形式、AVC

韓国語には動詞が複合した形式としていくつかのタイプがある。まず、最初の動詞(V1)が語幹の形式をとるものがあるが、このタイプが語彙部門で形成される、あるいは語彙部門に登録された形式であることは、広く受け入れられている。このタイプを本稿では語幹複合動詞と呼ぶ。

(5) a. cilu-titi-ta (突く+踏む=つまさき立ちで立つ)

b. olu-nayli-ta (上がる+降りる=上がったりがったりする)

語幹複合動詞が語彙部門に登録されていることはあらゆる現象から明らかである。まず第一に、김창섭 (1981, 62)が指摘する様に、語幹複合動詞には意味的な透明性を持たないものがある。(6b)の統語的な構成が意味的に透明であるのに対し(6a)の語幹複合語は意味の特殊化が観察される。

(6) a. ttwi-nol-

jump (Stem)-play-

‘遊び回る’

b. ttwi-ko nol-

jump-Comp play-

‘飛び跳ねて遊ぶ’

第二に、김창섭 (1981, 61)は語幹複合動詞の生産性は低く、現代韓国語ではもはや生産的な語形成の規則ではないとしているが、これに従うと、語幹複合動詞は語彙部門に登録された形式であるということになる。

上で見た語彙的緊密性のテストに関する現象においても、語幹複合動詞が語彙部門

で形成されることが支持される。第一に、語幹複合動詞の一部を移動などの統語規則の適用対象とすることは許されない。

- (7) a. ay-tul-i kyeytan-ul olu-nali-ess-ta.
 child-Pl-Nom staircases-Acc go up(Stem) go down-Past-Dec
 ‘子供達が階段を上がったり下りたりした’
- b. *kyeytan-ul olu- ay-tul-i nali-ess-ta.
 staircases-Acc go up(Stem) child-Pl-Nom go down-Past-Dec

第二に、語幹複合動詞の一部を代用表現に置き換えることはできない。

- (8) ay-tul-i kyeytan-ul olu-nali-ess-ta.
 child-Pl-Nom staircases-Acc go up(Stem) go down-Past-Dec
 elun-tul-to keytan-ul olu-/* kule- nayli-ess-ta.
 adult-Pl-also staircases-Acc go up(Stem)/do so(Stem) go down-Past-Dec
 ‘子供達が階段を上がったり下りたりした。大人達も階段を上がったり降りたりした。’

第三に、語幹複合動詞を限定詞などで分割することはできない。

- (9) ay-tul-i kyeytan-ul olu-(* to/* nun) nali-ess-ta.
 child-Pl-Nom staircases-Acc go up(Stem)-(also/Cont) go down-Past-Dec
 ‘子供達が階段を上がったり下りたりも/はした’

最後は、述語分裂に関する事実も同じ結論を支持する。韓国語には述語を反復する構文があり、述語分裂 (Predicate Cleft) と呼ばれている。述語分裂は、次の様に、述語の語幹、名詞化接辞 ki、限定詞 -nun、述語という形式を取る。

- (10) ppang-ul mek-ki-nun mek-ess-ciman…
 bread-Acc eat-Noml-Con eat-Past-but
 ‘パンを食べたことは食べたが’

語幹複合動詞を述語分裂構文においた場合、複合語全体を反復しなければならず、V2のみを反復することはできない。

- (11) a. ay-tul-i kyeytan-ul olu-nali-ki-nun olu-nayli-ess-ciman.
 child-Pl-Nom staircases-Acc go up(Stem) go down-Comp-Cont go up(Stem) go down-Past-Dec
 ‘子供達が階段を上がったり下りたりはした’
- b. *ay-tul-i kyeytan-ul olu-nali-ki-nun nayli-ess-ciman.
 child-Pl-Nom staircases-Acc go up(Stem) go down-Comp-Cont go down-Past-Dec

以上の全ての事実は、語幹複合動詞が語彙部門に登録されていることを支持する。²

次いで、V1が V-e という形式をとり、かつ、V2の位置に特定の動詞が現れ、助動詞的な働きをするタイプがある。本稿ではこれを A (uxiliary) V (erb) C (onstruction) と呼ぶが、AVC はその生産性や意味的な透明性から統語部門で形成されることを支持する立場が一般的である。³

- (12) ilk-e cwu-/peli- etc.
read-E give/throw away etc.
‘読んであげる/しまう etc.’

AVC は完全に生産的であり、また、複雑述語全体の意味が V1と V2から構成的に導かれる。これはこの構造が統語部門で形成されるとする主張の根拠となっている。

上記の形態的緊密性テストを AVC に適用すると、一部のテストについては緊密性を示し、他のテストについては緊密性を示さないという一見矛盾した現象が観察される。第一に、AVC の一部を移動させることはできない。この事実は AVC の構成素が緊密に結びついていることを示す。

- (13) * Yenghi-lul tow-a ppalli cwu-ela. 김기혁 (1996, 281)
Yenghi-Acc help-E quickly give-Imp
‘ヨンヒを早く助けてやれ。’

一方で、以下の事実は、AVC の構成素が相互に独立していることを示唆する。まず、AVC の V1は代用表現に置き換えることが可能である。

- (14) Ywuseni-ka wuywu-lul masi-e peli-ess-ta. 김기혁 (1995, 224, 283)
Ywuseni-Nom milk-Acc drink-E throw away-Past-Dec
Namho-to wuywu-lul kulay peli-ess-ta.
Namho-also milk-Acc do so-E throw away-Past-Dec
‘ユソニが牛乳を飲んでしまった。ナムホも牛乳をそうしてしまった。’

代用表現化が統語部門で働く規則であるとする、この事実は AVC が統語部門で形成されることを支持する。次に、AVC は限定詞で分割することが可能である。

- (15) John-i Mary-lul mann-a-nun po-ass-ciman, K.-Y. Choi (1991, 43)
John-Nom Mary-Acc see-E-Cont see-Past-although
‘ジョンがマリーに会っては見たが、’

この事実は、統語部門において AVC の V1と V2が独立した語であることを支持し、AVC が統語部門で形成されることを支持する根拠とされている。⁴

² この結論は 김창섭 (1981)、T.-G. Chung (1993, 45)、S.-Y. Kang (1993)、E.-Y. Yi (1995) 等によっても支持されている。

³ K.-Y. Choi (1991)、김영희 (1993)、김기혁 (1995, 215)、Sells (1999) を始めとして多くの研究者がこの立場を採っている。

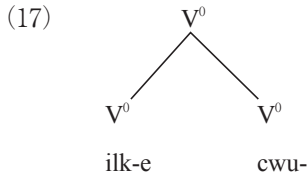
⁴ K.-Y. Choi (1991, 235) 参照。

最後に、AVC に述語分裂を適用した場合にも、AVC 全体だけでなく、V2のみの反復が可能であり、V1とV2が統語的に独立していることが支持される。

(16) a. John-i ku chayk-ul ilk-e po-ass-ta.
 John-Nom that book-Acc read-E see (try)-Past-Dec
 ‘ジョンがその本を読んで見た。’

b. (?) John-i ku chayk-ul ilk-e po-ki-nun po-ass-ta.
 John-Nom that book-Acc read-E see (try)-Noml-Cont see (try)-Past-Dec
 ‘ジョンがその本を読んで見たことは見た。’

以上の観察の内、ほとんどが AVC が統語部門で形成されるとする主張と矛盾しない。(12)の事実のみが AVC の語としての緊密性を示す様に見える。K.-Y. Choi (1991, 229) は AVC が次の様な統語構造を取ると主張することにより (12) の例の説明を試みている。本稿でも K.-Y. Choi に従うこととする。⁵



韓国語には更に、語幹複合動詞と AVC の中間とも言える特徴を示す複合動詞が存在する。AVC と同様、V1が V-e という形式をとるが、V2が助動詞的でないタイプの複合動詞がそれである。本稿ではこれらを V-e 複合動詞と呼ぶこととする。V-e 複合動詞は更に、V1と V2の意味から複合動詞全体の意味が構成的に導けるもの（以下では透明な V-e 複合動詞）と、構成的に導けないもの（以下では不透明な V-e 複合動詞）に分けることができる。⁶

透明な V-e 複合動詞が形成される部門に関して、統語部門で形成されるとする立場と、語彙部門で形成されるとする立場がある。生産性、意味的透明性に加えて V1と V2の独立性を示す事実が前者の立場の根拠となる一方、統語的な規則が V1や V2に適用できないことが後者の立場の根拠となっている。⁷

透明な V-e 複合動詞に対しては多くの研究があるが、これに対して不透明な V-e 複合動詞については存在が言及されているのみで、その統語現象については筆者の知る

⁵ 同様の構造は Sells (1999) でも提案されている。
⁶ V-e 複合動詞が二つに分けられることは、T.-G. Chung (1993, 46)、김기혁 (1993, 218)、Y. Lee (2002) などにも見られる。T.-G. Chung は不透明なものについては語彙部門に登録されているとしている。
⁷ 透明な V-e 複合動詞が統語部門で形成されるとする立場としては、T.-G. Chung (1993)、E.-Y. Yi (1995)、Y. Lee (2002) が、語彙部門で形成されるとする立場としては、B.-K. Kim (1993)、Y. Choi (2004) などがある。

限り体系的な考察は殆ど見られない。⁸ 以下では最初に不透明な V-e 複合動詞を中心に議論して行く。

2. 2. 不透明な V-e 複合動詞

不透明な V-e 複合動詞は表面的には二つのタイプに分けられる。第一は、V1と V2 がいずれも独立した動詞でありながら、これらの意味から構成的に複合動詞全体の意味が導けない (18) の様な例と、(19) の様に、V1が独立した動詞としては存在しない、いわゆる Cranberry Morpheme であるものが存在する。

- (18)a. kenmwul-i nayli-e anc-ass-ta.
building-Nom fall-Comp sit-Pst-Dec
'建物が崩れ落ちた'
- b. *kenmwul-i nayli-ess-ta.
building-Nom fall-Past-Dec
- c. *kenmwul-i anc-ass-ta.
building-Nom sit-Pst-Dec

- (19)a. thay-e na-ta
??-E come out-
'生まれる'
- b. tun-a tul-ta
??-E enter-
'出入りする'

(18) と (19) の表面的な違いに拘わらず、本稿では、これらを特に区別することなくいずれも不透明な V-e 複合動詞として扱うこととする。

統語部門で形成される句などの単位が構成的で生産性が高いのに対して、不規則な、あるいは生産性の低い単位、操作は語彙部門に属するとする一般的な仮定に基づくと、不透明な V-e 複合動詞が示す不規則性は、これらの複合動詞が語彙部門に登録されていることは明らかである。

不透明な V-e 複合動詞が語彙部門に登録されているとすると、これらの複合動詞の一部に統語的な規則を適用することは、語彙的緊密性の違反として排除されることが予測される。

また、1 節で述べた様に影山 (1993) は語彙的緊密性の具体例として、いくつかの操作が語の内部に適用することは許されないとしているが、不透明な V-e 複合動詞においても、同様の操作が許されないことが予測される。以下では、不透明な V-e 複合

⁸ 例外として浅尾 (2009) が挙げられる。

動詞が語彙部門に登録されているという仮定と語彙的緊密性のテストとの関連を見て行くこととする。

第一に、不透明な V-e 複合動詞において V1と V2は、限られた接辞が挿入される場合を除いて、隣接していなければならない。⁹

(20) a. cicin ttaymwun-ey kenmwul-tul-i manh-i nayli-e anc-ass-ta
 earthquake owing to building-Pl-Nom a lot fall-E sit-Past-Dec
 ‘地震のせいで建物がたくさん倒れた。’

b. *cicin ttaymwun-ey kenmwul-tul-i nayli-e manh-i anc-ass-ta
 earthquake owing to building-Pl-Nom fall-E a lot sit-Past-Dec

(21) a. atul-i tutie thay-e na-ss-ta
 atul-Nom finally ??-E come out-Past-Dec
 ‘息子がとうとう生まれた。’

b. *atul-i thay-e tutie na-ss-ta
 atul-Nom ??-E finally come out-Past-Dec

上記の事実は、不透明な V-e 複合動詞が語彙部門に登録されているとする仮定とは矛盾せず、語幹複合動詞の場合と同様、語彙的緊密性の予測する通りであると解釈することもできる。しかし、一方で、統語的に形成される AVC においても同様の操作が許されないことを考えると、語彙的緊密性以外の理由で上記の例が不適格になるとも解釈できる。

第二に、不透明な V-e 複合動詞では一部を代用表現に置き換えることはできないことを予測する。この予測の通り、このタイプの複合動詞の V1も V2も代用表現に置き換えることはできない。

(22) a. lhochka-ka khun kil-ey cep-e tu-n hwu-ey 2hochka-to khun kil-ey cep-e tul-ess-ta.
 1st car-Nom big street-Dat fold??-E enter-Adn after-Dat 2nd car-too big street-Dat
 fold??-E enter-Past-Dec

‘1号車が大通りにさしかかった後で、2号車も大通りにさしかかった。’

b. *lhochka-ka khun kil-ey cep-e tu-n hwu-ey 2hochka-to khun kil-ey kulay tul-ess-ta./
 cep-e kulay-ss-ta.
 1st car-Nom big street-Dat fold??-E enter-Adn after-Dat 2nd car-too big street-Dat
 do so-E enter-Past-Dec/ fold??-E do so-Past-Dec

(23) a. cinanhay-nun kangaci-ka thay-e na-ss-ko, olhay-nun koyangi-ka thay-e na-ss-ta.

⁹ 意味的に透明な V-e 複合動詞に隣接性が要求されることは多くの研究で指摘されているが、不透明な V-e 複合動詞に隣接性が要求されることを明示的に指摘した先行研究は筆者の知る限り存在しない。

last year-Cont puppy-Nom ??-E come out-Past-Conj, this year kitten-i ??-E come out-Past-Dec

‘去年は子犬が生まれ、今年の子猫が生まれた。’

- b. * cinanhay-nun kangaci-ka thay-e na-ss-ko, olhay-nun koyangi-ka kulay na-ss-ta./
thay-e kulay-ss-ta.

last year-Cont puppy-Nom ??-E come out-Past-Conj, this year kitten-i do so-E
come out-Past-Dec/??-E do so-Past-Dec

V1の代用表現化は明らかに語彙部門に登録されている語幹動詞でも許されないことを上に見た。不透明な V-e 複合動詞においても V1の代用表現化が許されないという事実は、このタイプの複合動詞が AVC と異なり、語彙部門に登録されていることを強く支持するという点で重要な事実である。

不透明な V-e 複合動詞が語彙部門に登録されているとすると、これらは完全な一語であり、語彙的緊密性に従うと V1と V2を分離することはいかなる場合でも分離できないことが予測される。この予測に反して、限定詞は V1-e と V2の間に介在することができる。¹⁰

- (24)a. kenmwul-tul-i nayli-e (-nun) anc-ass-ciman,
building-Pl-Nom fall-E (-Cont) sit-Past-but

‘建物が壊れはしたが、’

- b. Chelswu-nun thay-e (-nun) na-ss-ciman,
Chelswu-Top ??-E (-Cont) come out-Past-but

‘チョルスは生まれはしたが’

この事実はいくつかの点で大きな問題を示唆している。第一に、語彙部門に登録されている語の内部構造が参照できる場合があるという点である。(4) で見た様に影山 (1993) は語の内部には統語的要素が現れないとしており、この一般化は日本語の語彙的複合動詞の内部にとりたて詞が現れないことを説明する上で成功しており、また、(9) で見た様に、語彙部門に登録されていると考えられる語幹複合動詞の内部に限定詞が現れないことも同様に説明できるという点で有効な一般化である。¹¹ しかし、(24) の事実はその有効性を弱めることになる。

最後には不透明な V-e 複合動詞と述語分裂の関わりを見て行く。不透明な V-e 複合動詞が形態的に緊密で完全な一語をなしているとする、複合動詞全体の反復のみが

¹⁰ 事実の指摘としては K.-Y. Choi (1991, 55) に類例が見られる。不透明な V-e 複合動詞に焦点を当てた観察としては、浅尾 (2009) を参照。김기혁 (1995,414) は同様の例の容認度が若干落ちるとしているが、筆者の調査ではそのような容認度の低下は殆ど観察されなかった。

¹¹ この制約には別の説明も可能である。限定詞には接続する対象に対する選択制限があり、語幹はその選択制限の対象に含まれないという説明も可能である。J. H.-S. Yoon (1995)、Y. Choi (2004) を参照。

可能で、V2だけを反復することは許されないことが予測される。しかし、浅尾（2009）の（25b）の例や（26b）に見る様に、V2のみの反復が可能である。

- (25) a. thay-e na-ki-nun thay-e na-ss-ciman
 ??-E come out-Noml-Cont ??-E come out-Past-but
- b. thay-e na-ki-nun na-ss-ciman 浅尾（2009）
 ??-E come out-Noml-Cont come out-Past-but
 ‘生まれたことは生まれたが’
- (26) a. kyoswunim-un tol-a ka-si-ki-nun tol-a ka-si-ess-nuntye
 professor-Top turn-E go-Hon-Noml-Cont turn-E go-Hon-Past-but
 ‘教授は亡くなったことは亡くなったが’
- b. kyoswunim-un tol-a ka-si-ki-nun ka-si-ess-nuntye
 professor-Top turn-E go-Hon-Noml-Cont go-Hon-Past-but

この事実は、不透明な V-e 複合動詞の V1と V2が独立した語であることを示している。一方、(10) で見た様に、語幹複合動詞の場合、V2のみを反復することはできない。この事実も限定詞の挿入と同様、語彙部門に登録されている複合動詞不透明な V-e 複合動詞と対照をなす。

以上の議論をまとめると、不透明な V-e 複合動詞は、意味的不透明性と生産性の低さから語彙部門に登録されていると考えられるが、語彙的緊密性のテストの内、確実にこの前提と整合するのは代用表現における制限のみである。移動規則の不適用は統語部門で形成されると考えられ AVC にも見られるため、これが語彙的緊密性によるものかどうかははっきりしない。一方で、限定詞の挿入や述語分裂における V2のみの反復などは、語彙部門に登録されている語でも分割できる場合があることを示している。

2. 3. 透明な V-e 複合動詞

V-e 複合動詞の内、V1と V2の意味から複合動詞全体の意味が導けるものを透明な V-e 複合動詞と呼ぶ。透明な V-e 複合動詞に関する論考は多くある。透明な V-e 複合動詞が形成される部門についての議論では、統語部門で形成されるとする立場（T.-G. Chung (1993) etc.）と語彙部門で形成されるとする立場（B.-K. Kim (1993), Y. Choi (2004)）に分かれている。

前者の立場を採る T.-G. Chung (1993) の主張の根拠は、意味的な透明性と生産性に加えて、統語的に V1と V2が独立していることを示す事実があることである。第一に、透明な V-e 複合動詞には限定詞を挿入することができる。

(27) John-un hakkyo-ey kel-e-man/to tani-ess-ta. T.-G.Chung(1993, 17)

John-Top school-Dat walk-E-only/also come and go-Past-Dec

‘ジョンは学校に歩いてだけ/も通った。’

第二に、述語分裂において V2のみを反復させることができる。

(28) John-i koki-lul kwu-e mek-ki-n mek-ess-ciman E.-Y. Yi(1995)

John-Nom meat-Acc grill-E eat-Comp-Cont eat-Past-although

‘ジョンは肉を焼いて食べたことは食べたが、’

しかし、これらの事実は、不透明な V-e 複合動詞にも観察されるため、透明な V-e 複合動詞が統語部門で形成されるということを必ずしも支持しない。これに対し、V1を代用表現化すると不透明な V-e 複合動詞と同様に不適格になることから、透明な V-e 複合動詞も語彙部門で形成されることが支持される。¹²

(29) *senswu-to ttwi-e ka-ko, khochi-to kulay ka-n-ta. 김영희 (1993)

player-also run-E go-Comp. coach-also do so-E go-Pres-Dec

‘選手も走って行き、コーチもそうして(走って)行く。’

T.-G. Chung(1993) は透明な V-e 複合動詞が意味的透明性と生産性を見せることを、このタイプが統語部門で形成されるとする主張の根拠としているが、これらの性質は統語部門にのみ見られる訳ではなく、語彙部門にも透明且つ生産的な過程は存在するので、これは必ずしもこのタイプの複合動詞が統語部門で形成されることを支持する訳ではない。

これまでは議論の便宜上、透明な V-e 複合動詞と不透明な複合動詞を分けて来たが、以上の様な議論に基づき、いずれも語彙部門で形成される複合動詞と考える。

2. 4. まとめ

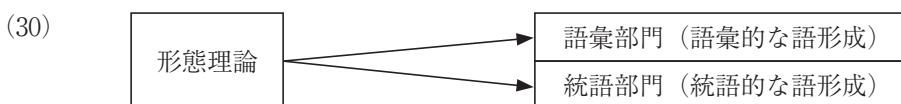
本節では、語幹複合動詞、AVC、不透明な V-e 複合動詞、透明な V-e 複合動詞の順に論じた。まず、語幹複合動詞はあらゆる基準に照らして語彙部門に登録されている語としての典型的な振る舞いを示す。次に AVC が統語部門で形成されることを最も強く支持する根拠として V1の代用表現化が可能であることを挙げた。

不透明な V-e 複合動詞の非生産性と意味的な不透明性は、V1の代用表現化ができないことともに、このタイプが語彙部門に登録されていることを支持する反面、語彙的緊密性に反して V1と V2の分割も可能である。即ち、語彙的緊密性の元に自然類をなすとされて来た現象が、二つに分類されなければならないことを示している。透明な V-e 複合動詞についても、本稿では語彙部門で形成されると考えるため、このタイプに関する諸々の現象も同じ方向を指している。

¹² 同様の観察は김창섭 (1981, 19)、淺尾 (2009) にも見られる。

3. 日本語との対照と理論的観点

日本語の複雑述語には、影山（1993）を始めとして多くの先行研究がある。影山は日本語の複合動詞を語彙的複合動詞と統語的複合動詞の二つに分けている。語彙的複合動詞が意味的な不透明性等に加えてV1の代用表現化が許されないのに対し、統語的複合動詞では意味的に透明且つ、V1の代用表現化が可能であるといった一連の特徴により区別される。語彙的か統語的かに関わらず、V1が連用形を取るものはとりたて詞による分割は許されない。影山（1993, 356）は、複合動詞化などの形態論的操作は独立したモジュールをなしており、語彙部門にも統語部門にも適用するとしている。統語的複合動詞は統語部門において複合化が適用することによって形成される。



複合動詞化が二つの動詞を形態的に一つの語とする過程であるとするならば、日本語の語彙的複合動詞と韓国語の語幹複合動詞は語彙部門で日本語の統語的複合動詞は統語部門で複合動詞化が起こったものと考えることができる。これらは、限定詞/とりたて詞の挿入などV1とV2の独立性を示す過程に従わない。

統語部門で隣接する（あるいは適当な統語構造にある）二つの要素が必ず複合動詞化を受ける訳ではないことは明らかである。例えば、AVCや日本語の(31)の様形式（以下日本語のAVC）はV1とV2が独立した語であることは明らかである。

(31) 読んでいる/あげる/くれる etc.

形態論モジュールが独立しており、また、複合動詞化等の形態論的規則が統語部門で適用する場合としない場合があるのなら、語彙部門においても複合動詞化が適用する場合としない場合があることは論理的にあり得る。本稿ではV-e複合動詞は語彙部門でV1とV2の組み合わせが起こる（あるいは語彙部門にV1とV2の組み合わせが登録されている）にもかかわらず、これらを形態的に一つの語とする複合動詞化規則が適用しない例であると主張する。この様な説明は(30)の様に形態論的過程を語彙部門から独立させたモデルでは可能だが、語彙部門と語形成を一体化させたモデルでは不可能である。

ここで問題となるのが、第一に、どういう場合に語彙部門で形成された、あるいは語彙部門に登録された複合動詞に（形態的）複合動詞化が適用しないのかという点であり、第二に、日本語に、韓国語のV-e複合動詞に相当するものがあるかどうかである。第三に、日本語の統語的複合動詞に相当するものが韓国語にあるかどうかである。

第一の疑問点は後で論じることとし、まず、第二の疑問点から論じる。これまで等

閑視されて来たが、日本語の複合動詞の内、(32)の様に V1がテ形をとる複合動詞（テ形複合動詞）が韓国語の V-e 複合動詞と並行した振る舞いを見せることを浅尾（2009）が指摘している。以下の議論は浅尾（2009）に基づくものである。

V1がテ形をとる複合動詞の多くは、韓国語の意味的に不透明な語彙の組み合わせの場合と同様に、複合動詞全体の意味を V1と V2から構成的に導くことができない。以下にいくつか例をあげる。

- (32) うってかわる うってでる みてとる やってのける
とっておく とってかわる くってかかる ほっておく
きってとる かってでる わってはいる ついていく
ついてくる くれてやる

例えば、「買って出る」は「買う」と「出る」から構成されるが、複合動詞が取る目的語を、それぞれの単独の動詞がとることはできない。「食ってかかる」も同様である。

(33)a. 憎まれ役を買ってでる。

b. *憎まれ役を買う。

c. *憎まれ役を/に出る。

(34)a. 上司に食ってかかる。

b. *上司に/を食う。

c. *上司に/をかかる。

この様な意味的な不透明性は、これらのテ形複合動詞が語彙部門で形成されることを強く示唆する。¹³ また、他の特徴に関しても、テ形複合動詞は V-e 複合動詞と並行している。第一に、V1と V2は隣接していなければならない。

(35) *上司に食って田中がかかった。

第二に、V1を代用表現で置き換えることができない。

(36) 田中は5時にやって来た。

*山田は6時にそうして来た。

第三に、とりたて詞が V1-テと V2の間に挿入されることはこれらが統語的に独立していることを支持する。

(37)a. 憎まれ役を買ってはでたが、

b. 上司に食ってはかかるが、

¹³ その他にもテ形複合動詞が語彙部門で形成されることを支持する根拠として、連用形名詞化があげられる。Poser (1992) は連用形名詞化が語彙部門の操作であるとしている。テ形複合動詞の中にも連用形名詞化が適用するものがある（「とっておく／とっておき」）ことは、テ形複合動詞が語彙部門で形成されることを支持する。但し、テ形複合動詞の連用形名詞化されたものはこの一例しか見つかっていない。

c. あの時の資料をとってさえおけば、

また、韓国語の述語分裂とは若干異なるが、日本語にも動詞を反復する規則があることが影山（1993, 264）によって指摘されているが、テ形複合動詞にこの規則を適用すると、V2のみの反復が許され、テ形複合動詞においてV1とV2が独立していることが支持される。¹⁴

(38) やって来い来い

テ形複合動詞の特徴はV-e複合動詞と全く同じであり、これらが同じ過程を経て形成されることを支持する。即ち、テ形複合動詞も語彙部門に登録されているが、複合動詞化によって形態的な一語となることはないことを支持する。

次いで、先に挙げた第三の疑問点、即ち、韓国語に日本語の統語的複合動詞に相当するものがあるか否かという疑問点について論じる。結論から述べるならば、韓国語には日本語の統語的複合動詞に相当する形式は存在しない。¹⁵ 日本語の統語的複合動詞に意味的に対応する形式の多くは別の形式で表現される。(40a)の様に韓国語では迂言的な構文が用いられたり、(40b)の様に副詞が用いられたりする。

(40)a. ilk-ki sicak-hay-ss-ta 読み始めた

read-Comp start-Do-Past-Dec

b. kyeysook ilk-ess-ta 読み続けた

continuously read-Past-Dec

AVCが日本語の統語的複合動詞に相当するのではないかという疑念が生じるかも知れない。しかし、AVCと統語的複合動詞は後者がとりたて詞の挿入を許さないなど形態的に緊密な一語をなしているのに対し、前者の構成素に独立性が見られるという大きな違いがあるため、AVCを日本語の統語的複合動詞に対応する形式と見ることはできない。

本節では、日本語の複雑述語について韓国語を参照しつつ論じた。以上の議論をまとめると、次の表のようになる。(41)の内、もはや生産的な過程とは言えない韓国語の語幹複合動詞(41A)を除くと、韓国語には二つの複合動詞の形式、日本語には4つの複合動詞の形式があることになる。更に、詳細に見るならば、韓国語のV-e複合動詞(41B)と日本語のテ形複合動詞(41E)、韓国語のAVC(41C)と日本語のAVC(41G)が対応する。これに対し日本語の語彙的複合動詞(41D)と統語的複合動詞(41F)は対応する形式が韓国語にないことが判明する。

(41)

¹⁴ 浅尾（2009）ではV2の反復の例として、「買って出たことは出た」という例を用いている。

¹⁵ この事実は中級程度の韓国語/日本語学習にはよく知られた事実である。

部門	韓国語			日本語			
	語彙部門		統語部門	語彙部門		統語部門	
	A	B	C	D	E	F	G
タイプ	語幹複合動詞	V-e 複合動詞	AVC	語彙的複合動詞	テ形複合動詞	統語的複合動詞	AVC
生産性	低	高/低	高	低	低	高	高
透明性	低	高/低	高	低	低	高	高
隣接性	義務的	義務的	義務的	義務的	義務的	義務的	義務的
代用表現	不可	不可	可	不可	不可	可	可
とりたて詞の挿入	不可	可	可	不可	可	不可	可
V2の反復	不可	可	可	不可	可	不可	可
活用形	語幹	V-e 形	V-e 形	連用形	テ形	連用形	テ形

4. 活用と複合語化

(41) に整理した様に、日本語と韓国語の複合動詞の諸形式にはお互いに対応するものと対応しない物があることがわかる。また、その対応の有無を決めるのが V1 の形式であることは明らかである。日本語において V1 が連用形を取る複合動詞は、韓国語にはこれに対応する複合動詞が存在しない。一方で、V1 がテ形である複合動詞は韓国語にも対応する形式があり、その V1 は V-e 形である。本稿では、最終的な結論には至らないが、韓国語には日本語の連用形に完全に対応する形態がないことが、(41) の様な分布をもたらすと考える。¹⁶

以下では、語形成における日本語の連用形の特徴を見ると共に、韓国語では、これに対応する形式がないことを見て行く。第一に日本語の連用形は名詞を形成することができるのに対し、韓国語では、名詞化専用の接辞が用いられる。一般に連用形に近いとされている V-e 形は名詞化の機能がない。

(42) 釣り、読み etc.

(43) a. ilk-ki cwuk-um
 read-NomI die-Nom
 ‘読み’ ‘死’

b. *ilk-e *cwuk-e

次いで、日本語の連用形は名詞と結びついて複合名詞を形成するのに対し、韓国語では同じ位置に現れる動詞は、名詞形もしくは連体形である。同じくこの位置には V-e 形は現れない。

(44) 賭け事 ゆで卵

¹⁶ 韓国語の V-e 形と日本語の連用形の異同については塚本 (2004) を参照。

- (45) a. *pipi-e pap pipi-m pap
 mix-E rice mix-Nominal rice
 ビビンバ
- b. *yel-e soy ye-l soy
 open-E iron open-Adnom iron
 鍵

語形成に関して V-e 形と同じ振る舞いをするのがテ形である。テ形は V-e 形と同じく、また連用形と異なり、名詞化、複合名詞への参加が許されない。

(46) *釣って (名詞) *読んで (名詞)

(47) *賭けて事 *ゆでて卵

この様に連用形対 V-e/テ形という分類にある程度の妥当性があることは示せるが、連用形が語彙的、統語的に拘わらず形態的な一語をなすのに対し V-e 形やテ形ではそれができないのかは明らかではない。

ここでは、可能な限りの考察を試みる。これらの活用形について考える前に、韓国語と日本語の語の形態的な認可条件について先行研究に触れておく。Sells (1995)、Cho and Sells (1994)、Iida and Sells (2008) は、韓国語と日本語の補部や修飾部の形態は、それらが結合する姉妹関係の範疇によって形態が規定されているとしている。名詞の投射の姉妹になる要素は、属格「の」、もしくは連体形をとらなければならない。これ以外の形態は述語の投射と姉妹関係になる要素の形態である。Iida and Sells (2008) は、前者の形態を PRE-N、後者の形態を PRE-V と呼んでいる。統語部門で形成される構造においては PRE-N は述語の投射とは共起せず、PRE-V は名詞の投射とは共起しない。

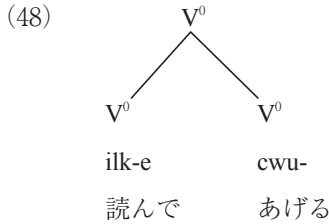
連用形は、その名の通り、統語部門では述語の投射としか結合しない PRE-V である。しかし、語彙部門で形成される語に関しては (44) に見るように、連用形は名詞とも結合し、語形成に参加する場合には一般的な統語部門での認可条件とは異なっていると考えられる。

一方で、V-e 形やテ形は V-e 複合動詞やテ形複合動詞および (45, 47) が示す様に、語形成あるいは語彙部門でも PRE-V 形である。ここでは語彙部門で複合動詞に現れる V-e 形やテ形は動詞と姉妹関係にあるために、形態論的過程によって形態的な一語とならなくても適格な統語表示を得られるという可能性を示唆するにとどめておく。

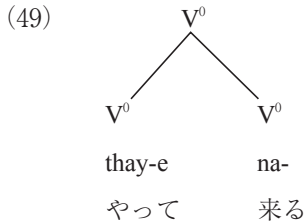
5. 構造

本節では、V-e 複合動詞、AVC、テ形複合動詞、日本語の AVC の統語構造について

て論じる。まず、韓国語と日本語の AVC については、K.-Y. Choi (1991)、Sells (1999)、Iida and Sells (2008) に従って、次の様な構造を仮定する。¹⁷



本稿では V-e 複合動詞、テ形複合動詞についても同様の構造を仮定する。



これらの動詞は語彙部門に登録されていることは明らかだが、この統語構造が語彙部門に登録されているのか、V1とV2の組み合わせが登録されており、統語部門でこの構造をとるのかはここでは議論しない。T.-G. Chung (1993, 106) も V-e 複合動詞について同じ構造を提案しているが、Chung の提案では V-e 複合動詞が純粹に統語部門だけで (49) の構造を取って形成されるとされているのに対し、本稿では、登録は語彙部門でなされ、統語部門では (49) の構造を取るという語彙部門と統語部門の分業を提案している点で異なる。

以下にこの構造の利点を述べて行くことにする。第一に、(49) の構造においては、V-e 複合動詞/テ形複合動詞の構成素が上位の V0 に支配されているが、これは、このタイプが統語的に一つの動詞として振る舞うことを導ける。また、この構造は 2 節、3 節で述べた現象を説明することができる。まず、第一に V1 と V2 の隣接性であるが、V1 にスクランピングなどの統語規則を適用することは、Lapointe (1979, 8) の定義の語彙的緊密性により排除できる。併せて、スクランピングなどが最大投射をその適用の対象として定義づけられているならば、それが V0 に適用された結果不適格になるとする説明も可能である。また、副詞句などをこの構造に挿入することも、V0 の内部に最大投射が現れるために不適格である。¹⁸

第二に、V1 もしくは V2 を代用表現化できないという現象も、代用表現化を統語的な規則とみなすならば、語彙的緊密性により正しく排除することができる。

¹⁷ Sells (1994, 1999)、飯田 (2002)、Iida and Sells (2008) は (48) の様な構造が形成される統語部門を下位句構造 (Sub-Phrasal Syntax) と呼んでいる。詳細はこれらの文献に譲る。

¹⁸ T.-G. Chung (1993, 98) 参照。

第三に、語彙的緊密性に従わない様に見える現象はどのように説明できるであろうか。(49) の様な構造をとるならば、V1と V2は統語的には独立した語であるため、限定詞が V1と V2の間に現れても、なんら問題がない。これに対し、V-e 複合動詞が語幹複合動詞と同様に形態的に一つの語をなしていると仮定するとこの現象には説明がつかない。

述語分裂における V2の反復についても考察してみよう。述語分裂は、右端の V0を反復する規則であると一般化することができる。従って複合語全体（上位の V0）を反復すると複合動詞全体を反復した適格な文が得られ、下位の V0を反復するならば V2のみが反復されこれまた適格な文が得られる。

V-e 複合動詞が（ ）の構造を持つと仮定すると、AVC と V-e 複合動詞が同じ振る舞いを見せることが予測される。事実、これらの構文は、隣接性の制約を始めとして多くの統語的特徴を共有している。更に、これらの動詞複合表現は、音韻的にも共通点を持つ。

動詞の中には V-e 形が 1 音節になるものがある。V-e 形が 1 音節になる動詞が AVC の V1として現れる場合、限定詞の挿入ができないという制約があることは Y. -M. Cho(1991) などで指摘されている。

(50)a. cap-a-to cwu-sey-yo. (Y.-M. Cho (1991)、Cho and Sells (1994))

hold-Comp-too give-Hon-Polite

‘持ってもください’

b. *ca-to cwu-sey-yo

sleep-Comp-too give-Hon-Polite

‘寝てもください’

c. *hay-nun po-sey-yo

do-Top try-Hon-Polite

‘してはください’

V-e 複合動詞にも同じ制約が適用する。

(51) *kkye-nun/man/to an-ass-ta. 김창섭 (1981, 54)

hold-Comp Pl/Top/only/too hold-Pres-Dec

‘だき - は/だけ/もした’

(52)a. yaksok-ul kka mek-ess-ta.

promise-Acc peel-E eat-Past-Dec

‘約束をすっかり忘れた’

b. *yaksok-ul kka-to mek-ess-ta.

promise-Acc peel-E-also eat-Past-Dec

この制約は V-e 形が一音節であっても、V-e 複合動詞や AVC 以外の V-e 形に適用されないことに注意が必要である。以下の例では独立した節を形成する V-e 形が 1 音節となる場合であるが、限定詞の後続は可能であり、1 音節制約が AVC や V-e 複合動詞固有の制約であると考えられる。

- (53) [S ankyeng-ul kkye-to] kyeysok nun-i nappa-ci ess-ta.
glasses-Acc put on-Comp-even continuously eye-Nom bad become-Past-Dec
‘メガネをかけても目が悪くなり続けた。’

以上の様に、V-e 形と AVC が様々な特徴を共有することは、これらが同じ統語構造を持つことと整合的である。

日本語の AVC とテ形複合動詞も多くの共通点を持っていることは既に述べた。更に、「方」名詞化においてこれらの構文は V1-テが「方」名詞化において、属格「の」を必要としないという特異な特徴を共有する。「方」は動詞を名詞化するが、日本語では名詞の投射に直接支配される要素は全て「の」もしくは連体形をとらなければならないため、動詞の項や修飾語はいずれかの形式を取ることが要求される。

- (54)a. 本を読む
b. 本の/*を読み方
- (55)a. 指示を受けて動いた
b. 指示を受けて* (の) 動き方

テ形の動詞と、動詞が連続する場合でも、最初のテ形動詞が後続する動詞から独立した節をなす場合には、「の」が必用とされる。

ところが、AVC とテ形複合動詞はこの一般的な原則に従わず、「方」名詞化においても共にテ形が維持され、「の」があると不適格になる。¹⁹

- (56)a. 本を読んであげた。
b. 本の読んで (*の) あげ方
- (57)a. 上司に食ってかかる。
b. 上司へ (*の) 食ってかかり方

音韻的にも、日本語の AVC とテ形複合動詞は共通した特徴を持ち、その特徴は他の構造には見られないものである。日本語の AVC が固有のアクセント規則に従うことは古くから指摘されている。AVC のアクセントパターンは次の様になる。

- (58)a. か ‘いて+やる → か’ いてやる

¹⁹ 影山 (1993, 360)、伊藤・杉岡 (2002, 107) はここで AVC と呼んでいるものの「方」名詞化ができない場合があるとしている。Kishimoto (2006) は V2 が時制に関するものである場合には AVC の「方」名詞化はできないが、「あげる」などは適格であるとしている。筆者の判断では、殆どの AVC が「方」名詞化が可能である。

- b. か ‘いて+し’ まう → か ‘いてしまう
- c. きいて+み ‘る → きいてみ ‘る
- d. きいて+やる → きいてやる

平山 (1962,913) の記述を規則の形で述べると次の様になる。

- (59) アクセントを持つ最初の構成素のアクセントが AVC 全体のアクセントになる。²⁰

テ形複合動詞に話しを戻すと、このタイプにも AVC と同じアクセント規則が適用することが分かる。即ち、テ形複合動詞は二つの統語的に独立した語からなるにも拘わらず、アクセントを持つ最初の動詞にのみアクセントが置かれ、全体では一つのアクセントしか持たず、アクセントに関しては一つの単位となる。²¹

- (60)a. う ‘って+で’ る → う ‘ってでる
- b. かって+で ‘る → かってで ‘る
 - c. と ‘って+かわる → と ‘ってかわる
 - d. くれて+やる → くれてやる

これに対して、V-テと動詞が並んでいる場合でも V-テが独立した節をなす場合には二つの動詞は独立したアクセントを持たなければならない。

- (61)a. う ‘って+はし’ る → う ‘ってはし’ る (*う ‘ってはしる)
- b. く ‘って+さわ’ ぐ → く ‘ってさわぐ’ (*く ‘ってさわぐ)

以上の様に、日本語のテ形複合動詞は AVC とアクセント規則に関しても共通している。片や語彙部門に登録され、片や統語部門で形成されるこれらの形式が同じ特徴を持つことは、両者が共通した統語構造を持つという本稿での説明から容易に導ける。

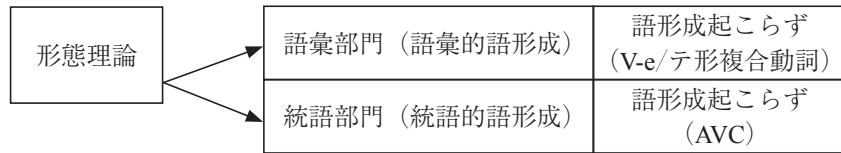
6. まとめ

本稿ではまず、韓国語の複合動詞を検討し、V-e 複合動詞は語彙部門で形成されながらも語彙的緊密性のテストの全てに従うのではなく、一部のテストには従わないことを示し、次に日本語の複合動詞の内、テ形複合動詞が同様の特性を示すことを見た。これに基づき、語彙部門に登録されている複合語が全て形態的に一語になる訳ではないと主張した。この主張は、影山 (1993) で提案された形態論的過程のモジュールを語彙部門から独立させるモデルでのみ可能であることを示した。以下に影山のモデルに語形成が起こらない場合を加えたモデルを示す。

²⁰ 影山 (1993, 360, 1999) は日本語の AVC が句のアクセントを持ち、構成素の両方のアクセントが維持されるとしているが、平山の例が示す通り、その観察は誤りである。

²¹ 既に、秋永 (1981, 49) で、AVC とテ形複合動詞が同じアクセントパターンを取ることが指摘されている。

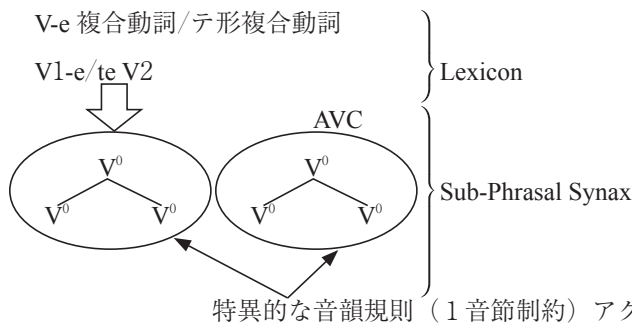
(62)



また、AVC に関して V⁰動詞が結合して V⁰を形成するという句構造を採用し、V-e/テ形複合動詞は語彙部門に登録されていながらも、同じ句構造を取るという分業のモデルを提案し、これにより、これらの複雑述語の類似点が捉えられることを示した。

最後に、これらの複雑述語の派生過程を図示しておく。

(63)



このモデルでは V-e 複合動詞/テ形複合動詞は語彙部門、AVC は統語部門で形成されるとするため AVC の中に V-e/テ形複合動詞は入れるが、V-e 形/テ形複合動詞中に AVC は入れないことが説明できる。

(64)a.

cwul-ul cap-a-tangki-e cwu-e po-ass-ta.
 rope-Acc hold-Comp pull-Comp give-Comp see (try)-Past-Dec
 ロープをつかんで引っ張ってくれてみた。

b.

*cwul-ul cap-a-cwu-e-tangki-e po-ass-ta
 rope-Acc hold-Comp give-Comp pull-Comp see (try)-Past-Dec
 ロープをつかんでくれて引っ張ってみた。

(65)a.

上司に食ってかかってくれた。

b.

*上司に食ってみてかかってくれた。

謝辞

本稿の作成にあたって調査に協力して下さった韓国語母語話者各氏に感謝する。また、衣畑智秀氏、佐藤直人氏には貴重なコメントをいただいた。なお、本研究は科研費 (課題番号: 21520407) の助成をうけたものである。

参考文献

- 秋永一枝 1981 『明解日本語アクセント辞典第二版』、三省堂、東京
- 浅尾仁彦 2009 動詞連続の文法的性質を捉えなおす－日韓対象を通じて－、関西言語学会ワークショップ「複雑述語の形式・機能とダイナミズム」ハンドアウト
- Cho, Young-Mee Yu 1991 “A Phonological Constraint on the Attachment of Particles in Korean,” *Harvard Studies in Korean Linguistics* 4, 37-46.
- Cho, Young-mee Yu and Peter Sells 1995 “A Lexical Account of Inflectional Suffixes in Korean,” *Journal of East Asian Linguistics* 4, 119-174.
- Choi, Kiyong 1991 *A Theory of Syntactic X0-Subcategorization*, Ph.D.Dissertation, University of Washington, Seattle.
- Choi, Youngju 2004 “Reexamination of Syntactic Approaches to Korean V-e V Compounds,” *Harvard Studies in Korean Linguistics*, 10, 386-398.
- Chung, Taegoo 1993 *Argument Structure and Serial Verbs in Korean*, Ph.D.Dissertation, University of Texas, Austin.
- Di Sciullo, Anna-Maria & Edwin Williams 1987 *On the Definition of Word*, MIT Press, Massachusetts
- 平山輝男1960 『全国アクセント辞典』、東京堂出版、東京
- 飯田雅代 2002 名詞化現象の語彙論的考察、伊藤たかね（編）『文法理論：レキシコンと統語』、東京大学出版会、東京、9-32.
- Iida, Masayo & Peter Sells 2008 “Mismatches between Morphology and Syntax in Japanese Complex Predicates,” *Lingua* 118, 947-968.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 2002 『語の仕組みと語形成』、研究社、東京
- 影山太郎 1993 『文法と語形成』、ひつじ書房、東京
- Kageyama, Taro 1999 “Word Formation,” Tsujimura, Natsuko (ed.) *The Handbook of Japanese Linguistics*, Blackwell, 297-325.
- Kang, Sun-Young 1993 “Serial Verb Constructions in Korean and their Implications,” *Studies in Generative Grammar* 3, 79-109.
- Kim Byong-Kwon 1993 “The Structure and the Argument-linking Conversion of V-V Compounds in Korean,” *Harvard Studies in Korean Linguistics* 5, 180-192.
- 김창섭 1981 현대한국어의 복합동사 연구, 국어연구 47, 1-98.
- 김기혁 1995 국어 문법 연구: 형태, 통어론, 박이정출판사
- 김영희 1993 의존 동사 구문의 통사 표상, 국어학 23, 159-190.
- Kishimoto, Hideki 2006 “Japanese Syntactic Nominalization and VP-internal Syntax,” *Lingua*

116, 771-810.

Lapointe, Steven 1985 *A Theory of Grammatical Agreement*, Garland, New York.

Lee, Youngjoo 2002 "V-Complementation in Serial Verb Constructions," *CLS (The Main Session)* 38, Chicago Linguistic Society, 409-419.

Poser, William J. 1992 "Blocking of Phrasal Constructions by Lexical Items," Ivan A. Sag and Anna Szabolcsi (eds.) *Lexical Matters*, CSLI Publications, Stanford, California, 111-130.

Selkirk, Elizabeth 1982 *The Syntax of Words*, MIT Press, Cambridge.

Sells, Peter 1998 "Structural Relationships Within Complex Predicates," Byung-Soo Park and James Hye Suk Yoon (eds.) *Selected Papers from the 11th meeting of the International Circle of Korean Linguists.*, ICKL, Seoul, 488-503.

Spencer, Andrew 1991 *Morphological Theory*, Blackwell, Oxford.

塚本秀樹 2004 文法体系における動詞連用形の位置づけ－日本語と韓国語の対照研究
－、佐藤滋、堀江薫、中村渉（編）『対照言語学の新展開』、ひつじ書房、東京、
297-317.

Yoon, James Hye-Suk 1995 "Nominal, Verbal, and Cross-Categorial Affixation in Korean," *Journal of East Asian Linguistics* 4, 325-256.

和田学 2010 韓国語のいわゆる軽動詞構文の分類、山口大学文学会志、75-92.